

昭和最後の年、藤間宗家の自宅では、約十年ぶりに開催される「勘十郎の会」の稽古が行われていた。なぜ私がそこにいたのかは記憶にないのだが、当時、暇を見つけては六世宗家の話をうかがいに通っていたので、会の稽古があるから見に行くようにと宗家から勧められたのではないだろうか。

六世宗家が亡くなるのは平成二年十二月である。昭和の末年にはすでに歩行が不自由でゆっくりとしたものにはなっていたが、この会を開催し、孫二人、資真(康詞)と「橋弁慶」、舞と「五條坂」を踊り、自身は狂言からとった「通円」を創作する案が具体化し始めると、自ら階段の上り下りなどのリハビリを始めていた。

この時の「通円」の稽古は、宗家との体験の中で、もともと印象深い、いやもつとも驚かされた出来事となった。広い稽古場に一人、黒い桶に掛けて踊り始めた宗家の振りには、ただ茶をたてる動きだけで構成されていた。茶をたて、茶をたて、たて通し、手

みであったのだと気付いたのであった。なぜ稽古場では気付かなかったのか、自分の不明を恥じるほかない。「橋弁慶」と「五條坂」では、二人の孫と十分に動きながら踊って身体の壮健さを示し、そして座ったきりで「通円」を演じて見せる。この選択は、まさに宗家の到達した宗家ならではの芸の高みを示していたのである。

あらゆる動きをそぎ落とし、座ったきりでただ茶をたて続ける宗家の姿を通して浮かび上がったのは、人の生きる営みそのものであり、人それぞれの生きることの重さであった。茶をたて続けることも人生。踊りを踊り続けることも人生。人の生に軽重はない。「通円」において宗家は、宗家自身の長い人生を総括し、人の生きる重さを語ったのである。

茶をたて通しその人生が終わった時、その人生はまた、長い人の世の流れの中にくたかたのように消えて行く。後見の玉三郎が、それまで宗家が手にしていた茶碗を戴き拝した時、舞台に広がった深い無常観は、この曲の主題そのものであったといつてよい。

宗家の人生は踊るためにあり、その人生が「通円」には込められていたのである。

今年六世宗家藤間勘十郎が亡くなって十三回忌に当る。その年に七世宗家勘十郎は、我が子康詞に勘十郎の名を譲り、自身は

を合わせ命を終える通円。立ちもせず、ただ腰を掛けたままである。このような動きが舞踊なのだろうか。びっくりして呆然とするしかない。

やがて踊り終わった宗家は、ふっと表情をなごませると立ち上がる。そしてこちらにやってくる。にっこりと笑いながら「いかがでした。」と一言おっしゃったのである。今でもその顔は忘れられないが、自信にあふれ清々しいものであった。

正直、私はどう返答すべきなのか解らなかった。

宗家の踊りは動かない、というのは定評である。「関寺小町」をはじめ、動きは洗練されぬいて気持ち木位。しかし「通円」は、それどころではない。座って茶をたてるだけである。これが宗家の踊りなのか。稽古を拝見しただけでは、この曲の意味は全く理解することが出来なかったのである。

しかし「勘十郎の会」の当日、国立劇場でこの「通円」を見た時、宗家の稽古場でのあの顔は、自信から生まれた会心のほほ笑み。三世勘祖を名乗るといふ。正直にいえば、まだ早過ぎるのではないかという思いは否定出来ない。康詞がまだ若いということではない。近年の康詞の活躍は目覚ましい。振付の業績も増えている。勘十郎の名を継ぐことによって、それらがますます充実するのは間違いないだろう。彼にとつては早過ぎることはない。

早いというのは、七世宗家の勘祖襲名が早いという思いである。七世には踊り手として、振付師として大きな可能性がある。もちろん聡明な七世であるから、藤間家にとつて今がその時であるという考えがあつたの決定であろうし、引退をするわけでもなしと、笑いながらこれからの抱負を述べるだろう。

長年見続けてきた者としては、今後の三世勘祖の活躍を期待するしかない。父の跡を継いで歌舞伎の振付をし、同時に踊り手として舞台に立ってきた七世が、その名を譲つてどう変わるのか。七世の舞台は透明感にあふれ、ガラスのような繊細さがただよぶ。立ち姿にも七世独特な重力を感じさせない浮遊感があり、七世の舞踊を特徴付ける。これらは江戸時代の泥絵の具の味わいの残る歌舞伎舞踊とは異なった感覚といつてよい。宗家自身がどう考えているか不明だが、正直いって歌舞伎の女形舞踊に取り組む七世の舞台を見る時、私は時として違和感を感じるのである。それは七世が女性だというだけでなく、七世の貴重な個性なのだ

と私は思う。

逆に七世の個性が生きた曲として、私は即座に第一回高子の会の『楊貴妃』、第二回高子の会、藤を舞台全体に下げた新演出の『藤娘』、宗家継承の会『経正』をあげることができる。前者二曲は、この世の者ではない幻想の世界の人物である。七世の触れれば壊れてしまいそうな繊細さと、内に秘めた強い意志とが調和し、独自の世界を作り出された傑作である。この二曲の美しさは、今も目に焼き付いている。一方素踊りの『経正』は自身の振付。果てしなく続く立回りを通して戦国の世の無常が立ち上る、七世の代表作である。討っては討たれ、討たれては討つ戦国の世。七世の華奢な姿が、運命に翻弄され、歴史の中に消えて行く人間達への鎮魂を表すように見えた。

勘十郎の時代にはできなかったことを実現することが、今後の三世勘祖への期待である。始めに六世宗家の『通門』についてふれたのは、こうした世界こそ宗家藤間独特の芸域だと考えるからである。七世宗家は六世とは異なる個性を持っている。透明感と繊細さ。それは江戸の美意識より中世の幽玄に近いのではないかと思わせる時がある。いつか三世勘祖の、藤間宗家ならではの舞踊の創造を期待したいと思う。



▲『通門』2世勘祖
第3回勘十郎の会（昭和63年3月31日）



▲『経正』7世勘十郎
2世藤間勘祖追善舞踊会（平成4年9月27日）

第三十三回



私と踊り
藤間陽徳／市村萬次郎さん

浜町の二階の稽古場の昼時の休憩時間、六歳頃よりお稽古に上がりかなり雰囲気にも慣れてきた頃、乾拭き用の布切れを両足の足袋の下に引き、スケート宜しく舞台上で遊び回っていたのをつい最近の様に思い出す。青山の自宅より都電に乗り、歌舞伎座を左に築地本願寺を右に見て、明治座側のバス停まで約一時間。帰途は甘酒横町の焼きたて熱々煎餅をふうふう食べながらの子供にとっては遠路の道程であった。高一の頃には、六木木の杵勝で三味線、宗家で踊り、側の富沢町で鳴り物、そして青山で藤間勘市郎さんの稽古場と帰宅はいつも十時頃であっ

た。その後、三味線はよく弾いていたものの踊りの稽古はさぼり通して、先代のご宗家にお会いする度に「あら随分大きくなったわね」と言われ、「ウッ！そんなに稽古に来ていなかったか」と身の縮む思いがした。理科系に興味を持ち、苦手な踊りは興味の対象外であった。時はかわり、一九九六年の香港歌舞伎公演以来、台湾・イタリア・ドイツや東欧・バルト三国などの海外十二都市で「藤娘」を踊っている自分の存在がある。最初は返還前の香港。九竜サイドのカルチャーセンター、第十六回亞洲藝術節に参加しての公演であった。劇場はドイツ

式のオペラハウスの造りであり、どのような舞台作りにするかが大きなテーマであった。今のご宗家と御相談をし、大道具の保坂さん、照明の水野さんの意見も聞いている舞台作りとなった。日本の劇場に比べ、たつぽが高く間口が狭いので、松の木を上手にずらし、藤の花を五重に垂らした奥行きのある舞台にした。これがとても功を奏し大好評の内に終える事が出来た。この「藤娘」は、六代目菊五郎演出の見事さや新しさ、藤の精の淡い恋心、曲の心情の表現、舞台の綺麗さなどがあいまって、今の役者としての踊り手の自分を育ててくれていた気がする。勿論その「藤の花」の影に、先代のご宗家、梅幸のおじさん方のお姿が見え隠れしているの言うまでもない。